

# 英語で行う授業改善ガイドブック 《 2018 年度増補版 》

## はじめに

急速な社会のグローバル化に対して、私たちの教育現場では、当然のことながら教育活動の中で「グローバルな人材育成」を行うこともまた急務とされています。これは将来的にインターナショナルに活躍する人材育成という狭い意味のみならず、特に生徒・学生自らの内面においても、自尊感情を育み、他者と平和的・建設的なコミュニケーションを行うことができ、自らの意見や考えを適切に表現できる能力を身につけるという意味においても、重要な取り組みとなります。学習者自らの内面を広げ、知識や技術や態度を育成することで、外方向への行動の可能性を広げられる、バランスと質の高い教育内容が必要とされます。

英語をはじめとした言語学習は、それらを実現するための格好のツールの一つです。

「英語で英語の授業を行う」ことが、高等学校では2013年度よりすでに実施され、中学校では2018年度より段階的に導入し、2020年度の全面実施が目指されています。そのような状況の中、学習指導要領に捉われない高専においても、他教科や専門教科を含めて授業を英語で行うことの取り組みが徐々に始まっています。言語学習と内容学習をバランスよく行い、そこに主体的・対話的な深い学びの場を設けることで、学習者の総合的な力を伸ばそうという取り組みです。

2016年度より始まった「グローバル高専事業」の中で、第4ブロック中国・四国地方の「英語教育法検討部会」担当の高専の教員が中心となり、2017年度に、取り組みのキックオフとしてガイドブック（暫定版）を発行いたしました。2018年度は、部会員に加えて、英語で授業をすることを目指す高専の教員が2泊3日で「教員キャンプ」を行い、その研修成果として執筆した原稿を加えました。さらに2年間にわたり、協同学習やCLILの研修会を開催し、協同学習の先進中学校へも視察研修を行ってきました。部会員や研修参加者が、英語、英語以外の一般教科、ならびに専門教科など、その枠を超えて、英語で授業を行おうとするすべての教科の教員のために原稿を書き留めました。

2018年度の増補版は昨年度の内容も含み、「英語で行う授業改善」のためのガイドブックとして、広く教育現場に役立つことを願って発行したものです。理論や実践例、ちょっとしたコツなど、形式は様々ですが、主旨に沿ったアイデアを集めたのが本誌です。

英語で授業を行うための学習環境作りのためには、特に「中高接続」が大切です。中学校から高等教育へとスムーズに段差無く移行できる、共通の取り組みのフレームワークが

あれば、そのメリットは最大限に生徒・学生に還元されるはずです。

このガイドブックが、小学校から大学までの志を持つ全ての教員や研究者、そしてそれらを目指す学生に役立つものとなれば幸いです。

## 英語で行う授業の考え方

英語で授業を行う際、以下の点を大切にしました。

- ・ 英語使用は 100%の **All English** を意味するものではありません。日本語使用の方が、効率が良い場合は積極的に日本語を活用します。
- ・ 英語使用が適切である場面においては、極力英語で授業を行います。特に学習活動面においては、学習者に英語を多用させます。
- ・ 学習者の理解を促進するために、インターネット等の視聴覚資料を積極的に活用します。既得知識を活性化させ、さらに内容理解のために事前知識を広げ、教材に興味を持たせることが大切です。さらにマッピング等を用いて、図式による情報の整理も行います。
- ・ 授業が一方的な知識伝達形式にならないように、学習者中心のタスクを用意し、学習者の主体的で対話的で、深い学びのある、バランスの良い授業形態をめざしていきます。特にピアラーニング、アクティブラーニングは効果的な手法です。本誌では特に「協同学習」の方法論を紹介しています。
- ・ 指導方法やタスクは、オーセンティックで意味のあるものとし、日々の授業の中で、最小限の準備でルーチン化して使用できるものを選び掲載しました。
- ・ 授業は、PPP ( **P**resentation, **P**ractice, **P**roduction ) や **Focus on Form** など、言語習得理論に則った流れで構成することが大切です。
- ・ スカイク等を用いて、国内外のネイティブスピーカーや留学生等と相互交流ができる取り組みを紹介しています。
- ・ 以上のような具体性と継続性の中で、指導者は総合的に「英語で行う授業」の体制を確立することができ、学習者は中長期スパンで英語力と内容理解力が統合的に伸張することをめざしています。

## このガイドブックの使い方

- ・ 高校（高専）用教科書、中学校教科書とページを分けていますが、指導法やテクニックは共通して使えます。英語授業を元に他教科や専門教科での応用してください。
- ・ ウォームアップ（アイスブレイク）、インプット、アクティビティー、アウトプット等、授業の各段階で使えます。
- ・ 各資料の中の英文を参考に、扱う教材用に合わせて応用して使うことができます。
- ・ 具体的な指導例として、実践例を紹介している章もあります。各学校の実情に合わせて、リメイクして取り組む事が可能です。
- ・ 本文中の T は Teacher, S は Student, Ss は Students を意味し、A,B,C...は、個人をさしています。